



毎日、手入れする削蹄道具たち。左端の鎌は師匠の平澤津さんからいただいたもので、お守りとして大切にしています。

やすりで爪の形を整える

優勝後も慢心することなく、北海道の削蹄師のもとで技術を学ぶなど、常に向上心を持ち続けてきました。削蹄を始めて19年たった今でも、師匠の背中を追いつけています。

削蹄師は1日に平均10頭ほどを担当。大型の牛を相手に、体勢を変えながら慎重に作業するため、腰や腕に負担がかかる体力仕事です。

「爪を切った牛がせり市で良い評価を受けたり、農家さんから足が良くなったよと声をかけてもらうと、やっていて良かったと思います。牛が気持ちよさそうに立ったり歩いたりする姿は、何よりも励みになります」と笑顔で話します。

削蹄大会後には後輩へ技術指導もするなど、後継者育成にも尽力しています。「昨年まで2人の弟子を育てました。削蹄師は、技術だけでなく信頼が大切な仕事です。技術はもちろん、農家さんと接するときの礼節も重視して教えます」

深見さんは現在、削蹄師の資格の中で最上位である指導級の資格を持っています。指導級は曾於地区内で2名のみ。指導級になると農業大学の講師、削蹄大会の審査員を任されることもあります。

「現在、全国大会の競技委員を務めていますが、いずれは全国大会の審査員になりたいです」と今後の目標を話してくれました。

第101回 実は隣のスゴイ人



専用の鎌で爪を切る



削蹄師

ふかみ てっひさ
深見 哲久さん

曾於市内のスゴイ人にスゴイ人を紹介してもらおうこのコーナー。前回のスゴイ人、加治佐龍さんにご紹介いただいたこの方は「うちに来てくれる削蹄師は全国で優勝したスゴ腕の職人」とのこと。

今回は、末吉町二之方で削蹄師をしている深見哲久さんに話を伺いました。削蹄師は、牛の蹄を切りそろえることで健康を守る専門職です。牛の蹄は伸びすぎると歩きづらくなったり、傷んで病気になることがあります。削蹄師は専用の鎌で蹄を削り、やすりで形を整え、牛が痛みなく歩けるようにすることで、畜産現場を支える役割を担っています。

徳之島町出身の深見さんは大島高校、鹿児島国際大学を卒業後、鹿児島市内の警備会社に就職しました。学生時代からの知り合いであった、末吉町出身の奥さんとの結婚を機に曾於市に移住。奥さんの実家は牛の生産農家。

「牛の手伝いをする中で牛が毎日生き生きと過ごす姿を間近で見て、牛の健康を支える削蹄師に魅力を感じました」

義父の知人であった平澤津美朗さんに弟子入りし、1年間の見習い期間を経て削蹄師の資格を取得。今でも毎朝・毎夕、削蹄鎌を砥ぐなど道具の手入れはかかしません。

削蹄を始めてわずか6年後の平成25年、茨城県で開催された『第55回全国牛削蹄競技大会』では見事優勝を収めました。鹿児島県勢の優勝は師匠である平澤津さん以来15年ぶりの快挙でした。「最初の目標であった全国大会で優勝できて嬉しかった反面、削蹄を始めて6年だったのでまだまだ経験が足りないと思いました」